

# 二〇一〇年度 国語

(六十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

中一會

※楷書体で丁寧な字で解答すること。記述の問題は、時間のある限り、しっかりと構想を練ってから書き出すこと。また、解答欄の下に示す評価基準も確認しながら、文章をよく推敲すること。

一 次の文章は、宮澤賢治の「オツベルと象」の全文です。読んであとの問いに答えなさい。

……ある牛飼いが物語る。

## 第一日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。稲こき機械の六台も据えつけて、のんのんののののんと、おおそろしい音をたててやっている。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきり真っ赤にして足で踏んで機械を回し、小山のように積まれた稲をかたっぱしからこいていく。わらはほとんど後ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、もみやわらから立った細かなちりで、変にぼうっと黄色になり、まるで砂漠の煙のようだ。

その薄暗い仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹き殻をわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回ってるから、のんののんのんふるうのだ。中に入るとそのために、すっかり腹がすくほどだ。そして実際オツベルは、そいつで上手に腹を減らし、昼飯時には、六寸ぐらいのビフテキだの、ぞうきんほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやってきた。白い象だけ、ペンキを塗ったのでないぜ。どういうわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入り口に、ゆっくり顔を出した時、百姓どもはぎょっとした。なぜぎょっとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合っては大変だから、どいつも皆、一生懸命、自分の稲をこいていた。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらっと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、なんでもないというふうで、今までどおり行ったり来たりしていたもんだ。

すると今度は白象が、片足床に上げたのだ。百姓どもはぎょっとした。それでも仕事が忙しいし、かかり合ってはひどいから、そっちを見ずに、やっぱり稲をこいていた。

オツベルは奥の薄暗い所で両手をポケットから出して、も一度ちらっと象を見た。それからいかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢よく、前足二つ突き出して、小屋が上がってこようとする。百姓どもはぎょっとし、オツベルも少しぎょっとして、大きな琥珀のパイプから、ふっと煙を吐き出した。それでもやっぱり知らないふうで、ゆっくりそこらを歩いていった。

そしたらとうとう、象がこのこ上がってきた。そして機械の前のごとを、のんきに歩き始めたのだ。

ところがなにせ、機械はひどく回っていて、もみは夕立かあられのように、パチパチ象に当たるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

オツベルはやっと覚悟を決めて、稲こき機械の前に出て、象に話をしようとしたが、その時象が、とてもきれいな、うぐいすみたいないい声で、こんな文句を言ったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしの歯に当たる。」

全くもみは、パチパチパチパチ齒に当たり、また真っ白な頭や首にぶつつかる。

さあ、オツベルは命がけた。パイプを右手に持ち直し、度胸をすえてこう言った。

「どうだい、ここはおもしろいかい。」

「おもしろいねえ。」象が体を斜めにして、目を細くして返事した。

「ずうっとこっちにいたらどうだい。」

百姓どもははっとして、息を殺して象を見た。オツベルは言ってしまったから、にわかにながた震えだす。

ところが象はけろりとして、

「いてもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をくしゃくしゃにして、真っ赤になつて喜びながらそう言った。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、働かせるか、サーカス団に売り飛ばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。

## 第二日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。それにこの前稲こき小屋で、うまく自分のものにした、象も実際たいしたもんだ。力も二十馬力もある。だいいち見かけが真っ白で、きばは全体きれいな象牙でできている。皮も全体、立派でじょうぶな象皮なのだ。そしてずいぶん働くもんだ。けれどもそんなに稼ぐのも、やっぱり主人が偉いのだ。

「おい、おまえは時計はいらぬか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめてこうきいた。

「ぼくは時計はいらぬよ。」象が笑つて返事した。

「まあ持つてみる、いいもんだ。」こう言いながらオツベルは、ブリキでこさえた大きな時計を、象の首からぶら下げた。

「なかなかいいね。」象も言う。

「鎖もなくちゃだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前足にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三足歩いて象が言う。

「靴を履いたらどうだろう。」

「ぼくは靴など履かないよ。」

「まあ履いてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張り子の大きな靴を、象の後ろのかかとはめた。

「なかなかいいね。」象も言う。

「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を、靴の上から、はめ込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二足歩いてみて、さもうれしそうにそう言った。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とは破け、象は鎖と分銅だけで、大喜びで歩いておった。

「すまないが税金も高いから、今日はすこうし、川から水をくんでくれ。」オツベルは両手を後ろで組んで、顔をしかめて象に言う。

「ああ、ぼく水をくんでこよう。もう何杯でもくんでやるよ。」

象は目を細くして喜んで、その昼過ぎに五十だけ、川から水をくんできた。そして菜っ葉の畑にかけた。

夕方象は小屋にいて、十把のわらを食べながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ。」と言っていた。

「すまないが税金がまた上がる。今日はすこうし、森から薪たきぎを運んでくれ。」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、

両手をかくしに突っ込んで、次の日象にそう言った。

「ああ、ぼく薪を持ってこよう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大好きなんだ。」象は笑ってこう言った。オツベルは少しぎよっとして、パイプを手から危なく落としそうにしたが、もうその時は、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくり歩きだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さなせきを一つして、百姓どもの仕事のほうを見に行った。

その昼過ぎの半日に、象は九百把薪を運び、目を細くして喜んだ。

晩方象は小屋にいて、八把のわらを食べながら、西の四日の月を見て、

「ああ、せいせいした。サンタマリア。」と、こう独り言したそうだ。

その次の日だ。

「すまないが、税金が五倍になった。今日はすこし鍛冶場へ行って、炭火を吹いてくれないか。」

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、ぼく、もう、息で、石も投げ飛ばせるよ。」

オツベルはまたどきっとしたが、気を落ち着けて笑っていた。

象はその鍛冶場へ行って、べたんと足を折って座り、ふいごの代わりに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把のわらを食べながら、空の五日の月を見て、

「ああ、疲れたな、うれしいな、サンタマリア。」と、こう言った。

どうだ、そうして次の日から、象は朝から稼ぐのだ。わらも昨日はただ五把だ。よくまあ、五把のわらなどで、あんな力が出るもんだ。

実際、象は経済だよ。それというのもオツベルが、頭がよくて偉いためた。オツベルときたらたいしたもんさ。

### 第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、おれも言おうとしてたんだが、いなくなったよ。

まあ落ち着いて聞きたまえ。前に話したあの象を、オツベルは少しひどくしすぎた。仕方がだんだんひどくなったから、象がなかなか笑わなくなった。ときには赤い竜の目をして、じっとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。

ある晩、象は象小屋で、三把のわらを食べながら、十日の月を仰ぎ見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と言ったということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、わらも食べずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と、こう言った。

「おや、なんだって？ さよならだ？」月がにわか象にきく。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「なんだい、なりばかり大きくて、からっきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月が笑ってこう言った。

「お筆も紙ありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしく泣きだした。

「そら、これでしよう。」すぐ目の前で、かわいい子供の声が出た。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立って、すずりと紙をささげていた。象は早速手紙を書いた。

「ぼくはずいぶんめに遭っている。みんなで出てきて助けてくれ。」

童子はすぐに手紙を持って、林の方へ歩いていった。

赤衣の童子が、そうして山に着いたのは、ちょうど昼飯ごろだった。この時、山の象どもは、沙羅樹さらじゆの下の暗がりあがりで、碁あなどをやっていたのだが、額あを集めてこれを見た。

# 二〇一〇年度 国語

(六十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

中一會

「ぼくはずいぶんめに遭っている。みんな出てきて助けてくれ。」

象は一斉に立ち上がり、真っ黒になってほえだした。

「オツベルをやっつけよう。」議長の象が高く叫ぶと、

「おう、出かけよう。グララアガア、グララアガア。」みんなが一度に呼応する。

さあ、もうみんな、嵐のように林の中を鳴き抜けて、<sup>①</sup>グララアガア、グララアガア、野原の方へとんでいく。小さな木などは根こぎになり、やぶやなんかもめちやめちやだ。グワア グワア グワア グワア、花火みたいに野原の中へとび出した。それから、なんの、走って、走って、とうとう向こうの青くかすんだ野原の果てに、オツベルの屋敷の黄色な屋根を見つけると、象は一度に噴火した。

グララアガア、グララアガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の寝台の上で昼寝の盛りで、からすの夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向こうを見た。林のような象だろう。汽車より速くやってくる。さあ、まるつきり、血の気もうせて駆け込で、

「だんなあ、象です。押し寄せやした。だんなあ、象です。」と、声を限りに叫んだもんだ。

ところがオツベルはやっぱり偉い。目をぱちりとあいた時は、もうなにもかもわかっていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。いる？いる？いるのか。よし、戸を閉める。戸を閉めるんだよ。早く象小屋の戸を閉めるんだ。ようし、早く丸太を持ってこい。閉じこめちまえ、ちくしよめじたばたしやがるな、丸太をそこへ縛りつける。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五、六本、持ってこい。さあ、だいじょうぶだ。だいじょうぶだとも。慌てるなったら。おい、みんな、今度は門だ。門を閉める。かんぬきをかえ。突っ張り。突っ張り。そうだ。おい、みんな心配するなったら。しっかりしろよ。」オツベルはもう支度ができて、ラツパみたいないい声で、百姓どもを励ました。ところがどうして、百姓どもは気が気じゃない。こんな主人に巻き添えなんぞ食いたくないから、みんなタオルやハンケチや、汚れたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をする印なのだ。

オツベルはいよいよ躍起<sup>o</sup>となって、そこら辺りを駆け回る。オツベルの犬も気がたつて、火のつくようにほえながら、屋敷の中をはせ回る。

まもなく地面はぐらぐらと揺られ、そこらはばしやばしや暗くなり、象は屋敷を取り巻いた。グララアガア、グララアガア、その恐ろしい騒ぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」優しい声も聞こえてくる。

「ありがどう。よく来てくれて、ほんとにぼくはうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、周りの象は、いつそうひどく、グララアガア、グララアガア、塀の周りをぐるぐる走っているらしく、たびたび中から、怒って振り回す鼻も見える。けれども塀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象も壊せない。塀の中にはオツベルが、たった一人で叫んでいる。百姓どもは目もくらみ、そこらをうろろろするだけだ。そのうちの象どもは、仲間の体を台にして、いよいよ塀を越しかかる。だんだん、にゅうと顔を出す。そのしわくちやで灰色の、大きな顔を見上げた時、オツベルの犬は気絶した。さあ、オツベルは撃ちだした。六連発のピストルさ。ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア。ところが弾は通らない。きばに当たれば跳ね返る。一匹なぞはこう言った。

「なかなかこいつはうるさいねえ。パチパチ顔へ当たるんだ。」オツベルはいつかどこかで、こんな文句を聞いたようだと思しながら、ケースを帯から詰め替えた。そのうち、象の片足が、塀からこっちはみ出した。それから一つはみ出した。五匹の象がいつべんに、塀からどつと落ちてきた。オツベルはケースを握ったまま、もうくしゃくしゃにつぶれていた。早くも門が開いていて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マツチのようにへし折られ、あの白象は大変やせて小屋を出た。

「まあ、よかったね、やせたねえ。」みんなは静かにそばに寄り、鎖と分銅をはずしてやった。

「ああ、ありがとう。ほんとにぼくは助かったよ。」白象は寂しく笑ってそう言った。

おや、川へはいっちゃいけないいたら。

問一 時間とともに変化しているものがいくつかあるが、適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 仕事の量    イ 月の満ち欠け    ウ オツベルの態度    エ わらの量

問二 傍線部①「グララアガア、グララアガア」が表しているものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山の象たちの怒りの声    イ 林の木々が揺れ動く音    ウ やぶや木がつぶされる音  
エ 大地が大きくふるえる音    オ 全力で走る象たちの足音

問三 作品中の「白象」の生き方について、あなたはどのように感じますか。オツベルや仲間の象たちとのやり取りを踏まえ、その言動に共感できるか否かを明らかにし、その理由も含めて二百字以内でまとめなさい。

問四 二重傍線 a s e の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

二 次の文章は、齊藤孝の「書く力」からの抜粋(問題作製のため一部変更・省略あり)である。読んで、あとの問いに答えなさい。

上手に話せる、だから上手に書ける、と思っている人がいる。

しかし、それは温泉旅館に泊まってピンポンをして、それで自分は卓球がうまいような気になるのと同じである。温泉旅館でいくらピンポンをしても、絶対にうまくならない。もちろん、できないよりはできたほうがいいかもしれないが、それだけである。お互い楽しんでやっているのなら、それでいい。しかし、スポーツとして卓球をやるのはまったく違う。

書くことを、温泉旅館のピンポンのように安易に考え、人はだれでも話せるから書ける、と思っている人がいる。

たしかに人並みはずれた異常な体験をした人がそれを話すように書いたら、それはそれでおもしろいものができるだろう。

①、それは異常な体験に価値があるのであって、話せばそのままでも十分にもしろいものをそのまま文字に置き換えているだけである。

そういう書き方では、異常な体験をしなければ、あるいはよほど人と違ったユニークな視点がなければ、何も書けないことになる。

本書は、だれでもが書くことによって、思考力が鍛えられ、自分なりの視点を持つことができるようになることを目指している。

普通の人々が、ふだん話しているように、言葉を並べて書きつらねるだけでは、人が読んでおもしろく、興味を抱くものにはならない。話をしているときには、それほど意味がないことでも、相手は聞いてくれる。話すほうも、それほど考えて話しているわけでもない。だが、書くとなると、そうはいかない。

なぜ、書くことで考える力を高められるのか。それは、書く作業ではつねに脳をフル回転させる必要があるからだ。とはいっても、自分が思ったことをただ書くだけでは、脳が鍛えられることはない。意味のある文章も書けない。

いまの若い人たちは、感じたことをコピーのような短い文章で表現することはうまい。だが、長い文章を書くのは苦手である。

感じたことを気のきいた言葉にするのと、きちんとまとまりのある文章にするのでは、脳の働かせ方がまったく違うのだ。

気のきいたコピーならば、思いつきでもつくることができる。だが、テーマがあって、論旨のはっきりした文章を書くとなれば、何を書くか、文章をどう組み立てるか、どうすれば自分なりの角度ある見方を表現できるかと考えなくてはならない。

書くためには、そうしたことを順を追って考えていく作業が必要である。そこで脳をフルに働かせなくてはならない。②、思考を緻密ちみつにしていく作業が、書く作業にはともなう。だから、書くことで脳は鍛えられる。

ある程度の長さのまとまった文章を書くのは、長い距離を高速で走り切るようなものだ。それだけの体力・知力が必要とされる。走るのも練習を重ね、長い距離をこなすことで鍛えられるように、書くことも、実際に書くトレーニングを重ねることによって鍛えられる。

何を書くかとなれば、手紙、論文、報告書、小説など、さまざまなものが考えられる。本書では、手紙、メールなど個人的なものではなく、あくまでも公共的な文章を取り上げる。自分の考えを過不足なく表現して人に理解してもらおう、また、客観的な資料として、人に提示して理解してもらおうものである。評論や論文、きかく書aがそれに当たるだろう。どうすれば書くことが上達するか。

書くことの上達の基本も、スポーツの上達の基本と通じる。スポーツで上達するためには、いまの自分の状態がどのレベルにあるかを知ることが第一のポイントである。自分の状態が刻一刻、変化するのを細かく見分けられるようになる、それだけで上達への道に入っているといえる。

自分のいまの状態を知ることができないまま書いても進歩しない。③、他人に正確に通じるものは書けない。

④ 酒を飲んでいると、自分ではいいことを話しているつもりでも同じことの繰り返しで、話している内容が少ないどころか、まったくくないこともある。⑤、当人はそれに気がついていない。

それでも酔って話すことはできるが、書くとなると難しい。なぜ難しいか。それは、書くことが考えることをきわだ<sup>b</sup>って要求する作業だからだ。したがって、書く作業は、非常に疲れる。

しかし、書きはじめて一度ゾーンにはまると集中できる。またそこから抜け出たときには、自分が一皮剥むけていると実感することもできる。

レポートでも、四百字詰め原稿用紙で四〜五枚のものなら、思いつきで書いてしまうことがある。しかし、十枚以上のものになると、書きはじめる前に、十分に「構築」をしないと書ききれなくなる。

思いつきで書いていると、書き進めているうちに推進力が落ちてきて、論理がいつかんしなくなり、全体的に雑然とした文章になってしまう。当然で上がったものはいったい何を言いたいのかわからなくなる。

本書でいう「書く力」とは、ある程度の分量、四百字詰め原稿用紙で十枚以上の長さのものを書くことができる力である。そのためには、ある見通しのもとに構築していく力が必要になる。

ある程度の長さの文章を書くとなると、自分の考えに意味がないと、人に通じる文章にならない。後で読み返してみても、自分自身が虚むなしくなってくるとしたら、それはその文章に、人に通じる公共性がないからだ。

話しているときは、自分の話の内容があると思いつき込み、得々とくとくと話している人でも、いざ書いてみると、自分の話している内容がいかにも薄っぺらで、意味がないか、気づくはずだ。それが考えるきっかけになる。

書くことにおいては、そこにどの程度「意味」が込められているかという、意味の含有率が問題になるのだ。たとえば、夏目漱石の文章を読んでみると、その一枚にどの程度意味が入っているのかをいつも考える必要がある。

たとえば、夏目漱石の文章を読んでみると、うまい・下手という以前に、そこにいかに意味が込められているかがわかる。無意味な文章がほとんどないのだ。次の文章は、必ず前の文章とは違う、その文章なりの意味を持つように書かれている。

漱石の『X』の**ぼう**とうの文章を読んでほしい。

# 二〇一〇年度 国語

(六十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

中一會

親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かしたことがある。

(夏目漱石『』)

漱石は、この簡単明瞭な文章によって、江戸っ子でたんじゅん、誠実な主人公の性格をはっきりと描き出している。

問一 筆者が考える「書くこと」の意義と、その理由を百字以内で書いて答えなさい。

問二 「意味の含有率が高い文章」とは、どのような文章であると筆者は言っていますか。五十字以内で説明しなさい。

問三 空欄①～⑤に適する接続語を、次の中から記号で答えなさい。

ア また イ たとえば ウ または エ しかし オ しかも カ つまり

問四  に当てはまる夏目漱石の作品を答えなさい。

問五 二重傍線 a と e を漢字に直しなさい。

《記述問題構想スペース》

受験番号

得点

Answer grid for question 2 (top part)

Answer grid for question 2 (middle part)

Answer grid for question 2 (bottom part)

Answer grid for question 2 (bottom part)

Answer grid for question 2 (bottom part)

得点

《以下は記述問題の評価項目ですが、受験者は記入する必要はありません。》

Table with columns: 評価項目, a, b, c, 一, 二, 得点. Rows include: 応答, 字数, 表現, 文法, 語い・漢字, 内容, 読解, 根拠, 文・文脈, 全体の構成.

問五

a

b

c

d

e

問四

問三

①

②

③

④

⑤